

「知識」と「疑う目」が、何に対しても必要と実感

NPO 法人シニアラフ情報センター 小瀬有明子

横田先生のお話に出てきた「アジュバンド」「HPVワクチン」などの言葉は、ほとんど私が聞いたことがないものでした。

東日本大震災で商品CMが自粛されていた時に、繰り返し流されていた仁科亜季子さんと仁美さんが出演されていた子宮頸がん検診啓発CMを見ても、あまり意識に入ってきませんでした。子宮頸がんという言葉は知っていても、私には関係のないものという意識から興味がなかったというほうが大きい気がします。娘たちも接種を推奨していたころにはすでに、接種に適した年齢を過ぎていたので、幸か不幸かそのワクチンは接種していません。

そして今回の講義のタイトルから、最近あのCMが流れなくなったのには、理由があるのだと思い至ったのです。

講義を受けた後「子宮頸がんワクチン」についてインターネットで検索してみました。

病態や罹患経路、ワクチンによる副作用の話だけでなく、ワクチンにより「子宮頸がん」に罹患率がどれだけ下がるかという話などが流れていました。

人体に影響があるかもしれないもの、命にかかわるもの、尊厳を守れないものなどがあまりにも多く世の中に流通し、その知識を一番得やすい立場の人たちが簡単に世の中に広めすぎている気がします。

例えば、認知症薬についても、老人ホームの職員から、「製薬会社の力が強く、正しい情報が出されていない」という話を聞いたこともあります。

由紀さんの毎日新聞のコラムには、「利益と不利益を比較する科学的データが曲げられたり、副作用情報が隠されたりした結果、被害が拡大するのが薬害。副作用は薬が起こすが、薬害は人が起こす」とあります。特に医療に関すること、このワクチンによる副作用などのようなことは、普通の人とその副作用による症状を集め、分析することは難しいことです。

おかしいと感じた医療関係者が勇気をもって、それを世に伝えることが大事で、医療に関係する人たちは、直接的に、自分が患者に対しないとしても、命にかかわる仕事をしていることを真摯に受け止め、自分の親族に自信を持って利用をすすめることができる薬を使って欲しいと思います。

経済至上主義の今、会社の利益、個人の利益を一番と考えるのではなく、人として大事なことは何かを考えた上で利用を判断することが大切と今回の講義では教えていただきました。

ニュースの裏には何かがあるのか、その伝え方についても「知る事」。そして「疑う目」を持つことがどんなことにも必要だと感じました。

貴重な講義を伺う機会をいただき、ありがとうございました。

由紀さん、お母様の看病で大変な時ですが、どうぞご自愛くださいませ。

★-----*★*-----*★*-----*★*-----*★*

ゆきさま

以下のような返信を致しました。

小瀬有明子様

感想をお寄せいただきありがとうございました。

この経過の中で、医療界という狭い社会ではわからなかったいろいろなことを知りました。

あるとき、厚労省の人と話しているときに、私が「子宮頸がんワクチン」言ったら、「先生、正確に言葉を使って下さい」というのです。何かと思ったら「子宮頸がん予防ワクチン」だというのです。それはそうだ、とっていると、こんどは、「子宮頸がんワクチン」という言葉がどこにも出なくなり、いつの間にか正式には、「HPV ワクチン」と言えということになっています。

私たちは、当初から現在のワクチンは決して「癌ワクチン」ではないと考えており、「HPV ワクチン」と記載しておりました。このことは、「言葉を都合によりもてあそんでいる」としか思えません。

日本語で表現すればよいところを、あえて外国語を使って事を誤魔化す例は枚挙に暇はありませんが、こういう場合には” 眉唾 ” と考えてよいと、生活の知恵は教えてくれます。

ご意見をありがとうございました。

横田俊平 拝